

# 市場価値論再考

東 井 正 美

キーワード：市場価値決定と市場価格決定の相違、「現実的な」市場価値と「理想的な」市場価値、需給の「普通の」の組み合わせ、需給の「異常な組み合わせ」、市場価値の現実的な規定、需給関係は「価値の市場価値への転化を前提」、「ふた通りの需給一致」、社会的「必要労働時間」と「別個の意味」

経済学文献季報分類番号：02-32;02-33

## 1. 問題の所在

『資本論』第3巻第2編「超過利潤の平均利潤への転形」第10章「競争。市場価格と市場価値。超過利潤」において「市場価格と市場価値」とが論述されている。この稿が完成稿でないこともあって十分整理されたものと言われ難く、難解な章として知られている。

周知のように、市場価値に関する諸規定に関して、市場価値が商品総量の価値総量の算術平均として決定されるという「加重平均規定」と、その部面で大量をなす商品の個別価値が市場価値を規制するという「大量支配的規定」とが説かれているが、いずれが「正当な」ものとみなされるべきかということが問題とされてきた。いま一つは市場価値と需給関係についてどのように理解すべきかという問題である。これらの問題をめぐって多くの解釈が提示され、諸説紛々の感がある。これらの諸説については、本稿では市場価値論注解の原点とも見なすべき数点からの引用にとどめ、諸学説には立ち入らない。これらの学説については、鳥居伸好氏の『資本論』「第3部第10章における〈市場価値〉規定をめぐる論争」が詳しい [[6]]。

これまで、筆者は、問題の第10章「市場価格と市場価値」におけるこれらの問題をどのように理解すればよいのかについて考察してきた。試行錯誤をかさねて到達したのが、前稿「市場価格と市場価値」 ([7]) において提示した理解である。要点をかいつまんで述べておく。

第10章でマルクスが市場価値の諸規定を論述するにあたっては、市場価格が市場価値に一致しているという前提を置いている。したがって、市場価値の諸規定で取り扱われた市場価値は、市場価値の顔と市場価格の顔をもつことになる。このことが、市場価値自体の決定に需給関係がかかわるのではないかという誤解を生じさせた。需給関係は、市場価値の決定に関与するのではなくして、市場価格の決定に関与するのである。それゆえ、市場価値の決定法則と市場価格の決定法則とを分

けて考察する必要がある。この点について、いち早く指摘されたのは、山本二三丸氏である（〔5〕128～9ページ）。

市場価値の決定法則について「大量支配的規定」か「平均規定」かに関しては前稿で明らかにしたように、「厳密に言えば」（または「理想的」には）平均価値が市場価値を確定すべきだが、「現実には」その部面において「ほぼ同一の標準的な社会的条件」のもとで生産されて「その部面の生産物の大量をなす商品の個別的価値」が市場価値を決定する。要するに、市場価値規定に関する平均規定は「理想的な」規定であり、一方「大量支配的規定」は「現実的な規定」または「具体的な規定」である。

一方、市場価値に一致した市場価格の側から見れば、市場価格を決定するのは需給関係である。これについてマルクスは、①平均価値としての市場価値＝市場価格を成立させるような需要と供給の一致は、「普通の需要」と「普通の供給量」との対応としてとらえている。再生産された商品総量が「普通の供給量」で、需要もまた「普通の需要」である場合には、諸商品は平均価値＝市場価値としての市場価値どおりに販売され、購買される。平均価値＝市場価値という表記は市場価値が平均価値に等しいということの意味するだけでなく、市場価値が表示する「必要労働時間」と平均価値に含まれる「必要労働時間」が等しいということを表現するものである。この商品量に対する需要が不変のもとで、この商品の再生産量＝供給が「普通の供給量」である場合には、諸商品は平均価値としての市場価値どおりに売られる。②「現実には」大量商品の個別的価値が市場価値を規定する。劣位の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値が規制する市場価値に市場価格が一致するのは、「ただ、需要が普通の需要を超える場合か、または供給が普通の供給量よりも減る場合だけである。」いわゆる「不明瞭な箇所」は、最悪の生産諸条件のもとで、または最良の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別価値が規制する市場価値に、平均価値から背離した市場価格が一致した場合での需給の「異常な組み合わせ」についての叙述であることを明らかにした。

これらの諸点こそがマルクスの市場価値論の骨子だと考える。以上のことについて骨組みだけを明らかにしたのは前稿（〔7〕）である。これらの骨組みに肉付けをしておかなければならない。マルクスは、この第10章で需要と供給について詳しく分析している。本稿では、諸商品の諸個別的価値の「市場価値への転化を前提」として、その市場価値と一致した市場価格にかかわる限りでの需給関係をとりあげることにして、その需給関係にはそれ以上に立ち回らない。そして、「劣位相対的大量」または「優位相対的大量」の場合において、大量商品の個別的価値が、需給の「異常な組み合わせ」のもとで規制する市場価値＝市場価格が代表する「必要労働時間」が「別個の意味」をもつことを明らかにする。以上のことがとりもなおさず本稿の課題である。

本稿をもって、市場価格論に関する決定稿——私にとっての——としたい。

## 2. 市場価値の決定法則

### 1) 市場価値に関する「平均規定」と「大量支配的規定」

マルクスの市場価値についてこう定義する、すなわち「市場価値は、一面では一つの部面で生産される諸商品の平均価値と見られるべきであろうし、他面ではその部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす諸商品の個別的価値とみられるべきであろう。」と。

このように市場価値が平均価値であり、大量商品の個別的価値でもあるような市場価値は最も「理想的な」市場価値であるといえよう。

市場価値の規定に焦点を合わせてみれば、この前半のくんだりでは市場価値を確定するのは平均価値であり、後半のくんだりでは市場価値を規制するのが大量商品の個別的価値であると説かれているのである。かつて、大内力氏は、「平均原理をこの二つのいずれと理解するかということは、決して軽々に看過していいような問題ではない」と指摘された（[4]5～6ページ）。平均価値が市場価値を決定するという主張——以下、平均規定と呼ぶ——と、大量商品の個別的価値が市場価値を規制するという主張——以下、大量支配的規定と呼ぶ——とが相対立して現れ、今日まで続いているのである。

次に挙げる中位的商品大量、優位・劣位均衡という「第1の場合」に見られるような「最も理想的な市場価値」については問題がない。それでもやはり、その前半のくんだりでの「平均規定」と、後半のくんだりでの「支配的大量規定」とは規定そのものが全く異なるのである。マルクスは、以下のように定義すべきであった。「市場価値は、『厳密に言えば』一つの部面で生産される諸商品の平均価値とみられるべきであろうし、[現実的には]その部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面で大量をなす諸商品の個別的価値とみられるべきであろう。」と。つまり、その前半のくんだりでは、後にみる「厳密に言えば」での市場価値の平均価値による確定が述べられてあり、その後半のくんだりでは、「現実的に」大量商品の個別的価値によって規制される市場価値が説かれてある。平均価値と大量商品の個別的価値とが一致すればもっとも理想的な市場価値が成立する。しかし、マルクスは、市場価値は「現実には、ただ、近似的に、非常にさまざまに変容して現れるだけである」と述べている。「現実的に」大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は、平均価値に近似的に現れ一致することがないと指摘しているのである。

マルクスは「三つの場合」を挙げて、先ず市場価値規定に関する「現実的な」市場価値を提示している。「三つの場合」を挙げれば、以下のとおりである。

「第1の場合」：同一部門において生産され、同一の市場に供給されている同種の諸商品の「商品大量がほぼ同一の標準的な社会的諸条件のもとで生産されていて、この価値は同時に、この大量をなす個々の商品の個別的価値でもあると仮定しよう。いまもし、比較的小さい1部分はこの諸条件よりも悪い諸条件のもとで生産され、他の1部分はそれよりも良い諸条件のもとで生産されており、したがって、一方の部分の個別的価値は大部分の商品の中位的価値よりも大きく、他方の部分の個

別的価値はこの中位的価値よりも小さいが、しかしこの両極は平均されて、両極に属する商品の平均価値は中位の大量に属する商品の価値に等しいと仮定しよう。」

「第2の場合」——「第1の場合」とは「反対に、問題の商品の市場に出される総量はやはり同じままであるが、しかし悪い諸条件のもとで生産される諸商品の価値がより良い諸条件のもとで生産される諸商品の価値と相殺されないために、より悪い諸条件のもとで生産される諸商品の大量が中位の商品量に比べても他方の極に比べても相対的にかなりの大きさを占めているものと仮定しよう。」

「第3の場合」——「最後に、中位よりも良い諸条件のもとで生産される商品大量が、中位よりも悪い諸条件のもとで生産される商品量よりもずっと多く、また、中位の事情のもとで生産される商品量に比べてもかなりの大きさを占めていると仮定しよう。」

マルクスがこの三つの場合で市場価値の諸規定を論述しているのだが、そのさい市場価値を取り扱うにあたり前提としていたことを挙げておこう。

## 2) 市場価値の諸規定での市場価値は市場価格と一致

マルクスは、市場価値の諸規定で取り扱われた市場価値が、断りのない限り市場価格に一致した市場価値であるということを前提としていたのである。

諸商品が市場価値どおりに販売され購買されるためには、需給関係が決定する市場価格が市場価値に一致していなければならない。諸商品の市場価格がその市場価値から背離すれば、諸商品は市場価値どおりに販売され購買されなくなる。マルクスは市場価値に関する諸規定を論じるにあたっては、諸商品の市場価値どおりに販売され購買されるということを前提とする。したがって、諸商品の市場価格はその市場価値に一致していることになる。市場価格と市場価値との一致についての、マルクスの叙述を挙げておこう。

「同種の諸商品、といってもそれぞれ個別的な色合いの違う事情のもとで生産される諸商品の市場価格が市場価値と一致して、それよりも上がったり下がったりすることにより、市場価値から背離しないためには、いろいろな売り手たちが相互に加え合う圧力が十分に大きくて、社会的欲求をみたすに十分な商品量、すなわち社会が市場価値を支払うことのできる商品量を市場にださせるということが必要である。生産物の量がこの欲望をこえれば、商品はその市場価値よりも安く販売しなければならないであろう。逆にもし生産物の量が十分に大きくないならば、または、同じことだがもし売り手たちのあいだの競争の圧力が強くなく彼らにこの商品量を十分に市場に出させることができない場合には、商品はその市場価値よりも高く売らなければならないであろう。」

マルクスが取り扱っている市場価値についてあらかじめ知っておくべきことは、①他人のために売るために生産された諸商品がこの市場価値どおりに購買されて社会的欲求をみたすことをもって、はじめて市場価値は社会的価値となる。したがって、マルクスは、市場価格と市場価値の一致を前提として、「第1の場合」において「この商品量の市場価値または社会的価値——この商品量に

必然的に含まれている労働時間——は、中位の大量の価値によって規定されているのである。」と言  
い、「第2の場合」には、「悪いほうの条件のもとで生産される商品大量が市場価値または社会的価  
値を規制する」と、述べているのである。この場合での市場価値が市場で代表する「必要労働時間」  
は、後に考察するように「別個の意味」をもつ。②諸商品が市場価値どおりに販売され購買される  
ためには、市場価値は市場価格と一致していなければならない。市場価値の諸規定において取り扱  
われている市場価値は市場価格に一致しているものである。これについて、マルクスは次のように  
指摘している、すなわち「ここで取り扱うのは、市場価値とは別ものである限りでの市場価格では  
なく、市場価値のさまざまな規定である。」と。

市場価値に市場価格が一致しているということを市場価値＝市場価格と表記する。言うまでもな  
いが、市場価値イコール市場価格は、市場価格が市場価値に一致しているということを意味するだ  
けではなく、市場価値が表示する労働時間と市場価格が表示する労働時間が等しいということをも  
意味する。そして商品総量の市場価値を表示する貨幣額、すなわち市場価格は、同時にこの商品総  
量に対する「支払能力のある社会的欲望——市場では需要」によって規定されている。

### 3) 市場価値の決定法則と市場価格決定法則とは別個

市場価値の決定法則と市場価格の決定法則とは別個のことである。この点についての指摘は、山  
本二三丸氏をもって嚆矢とする。山本氏は言う、「市場価値決定と市場価格決定との相違、したがっ  
てまた、これらの決定に参与するそれぞれの諸要因は、厳密に識別され、明確に把握されるべきで  
あって、軽々しく混同されるべきではない。」と（〔5〕128～9ページ）。

市場価値の決定についていえば、同じ市場に供給される同種の諸商品の市場価値を確定するのは、  
「厳密に言えば」平均価値である。平均価値に確定された市場価値は、市場価値の「理想的な」姿  
であり、市場価値のあるべき姿である。平均価値に確定された「理想的な」市場価値は、「現実的な」  
市場価値とは一致しないのが通常である。両者が一致するのは偶然に過ぎない。

「現実には」市場価値を規定するのは、その部面の「社会的標準的な生産諸条件」のもとで生産  
されて「その部面の生産物の大量をなす商品の個別的価値」である。これらの決定について既に前  
稿〔7〕で明らかにした。さらに、後段で考察しよう。

一方、市場価値に一致する市場価格は需給関係によって決定される。需給の変動によっては、市  
場価格は、市場価値から背離し、市場価値を重心として変動する。しかし、市場価値の諸規定で取  
り扱われている市場価値は、すでに指摘しておいたように、市場価格と一致していると仮定されて  
いる。問題の諸商品は、市場価値＝市場価格どおりに販売され、購買されるものと仮定されている。  
この仮定は重要であって、常に念頭において置かなければならない。次に、市場価値の諸規定をみ  
よう。

#### 4) 市場価値の「現実的な」規定は支配的大量規定

先ず、「現実には」市場価値はその部面で大量をなす商品の個別的価値によって規定されるといふ「大量支配的規定」が説かれている。

「第1の場合」には「市場価値は、中位的諸条件のもとで生産された商品の価値によって規定される。この商品量全体の価値は、中位的諸条件のもとで生産された諸商品も、それよりも下または上の条件のもとで生産された諸商品を含めての、すべての個々の諸商品の価値を合計した現実の総額に等しい。この場合には、この商品量の市場価値または社会的価値——商品量に必然的に含まれている労働時間——は、中位の大量の価値によって規定されているのである。」

この場合には「標準的な社会的条件」である中位の生産諸条件で生産されてその部面で大量をなす商品の個別的価値が規定する市場価値は平均価値に等しいのである。この市場価値は、「理想的な」市場価値とみなすべきである。この「理想的な」市場価値を市場価値の諸規定を論述するに当たっての出発点においている。

「第2の場合」には、「より悪い諸条件のもとで生産された商品大量が市場価値または社会的価値を規定する。」この場合には大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は、平均価値と一致しないが、それに近似的に現れる。この商品総量の市場価値〔総計〕は、この商品総量の価値総量よりも大きい、それに近似的である。

「第3の場合」には「最良の諸条件のもとで生産された部分が市場価値を規制する。」

この場合にも市場価値は、平均価値に近似的に現れる。この商品総量の市場価値は、この商品総量の価値総量よりも小さいがそれに近似的である。

ともあれ、市場価値の諸規定に関して「大量支配的規定」が与えられている。この「大量支配的規定」は「現実的な規定」または「具体的な規定」であるといえよう。

「第2の場合」と「第3の場合」のいずれの場合においても、諸商品の市場価値総計は、その総価値量とは相違するが、両者は近似的である。したがって、市場価値は平均価値に近似的である。これを、市場価値 $\approx$ 平均価値と表示しよう。

ここで注解しておくべきことは次のことである。

「第3の場合」において「大量支配的規定」を説いてから、すぐ語をついで述べていることに注目しておこう。「市場が供給過剰の場合には、いつでも、最良の諸条件のもとで生産される部分が市場価格を規制するのであるが、このような場合はここでは問題にしない。われわれがここで取り扱うのは、市場価値とは別ものであるかぎりでの市場価格ではなく、市場価値そのもののいろいろな規定なのである。」と。これについてはこう解釈する。

「第1の場合」においても、「第2の場合」においても、「第3の場合」においても市場が供給過剰であればいつでも最良の諸条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価格を規制する。この市場価格は、「第1の場合」と「第2の場合」には平均価値 $=$ 市場価値からも平均価値 $\approx$ 市場価値からも背離している。市場価値の規定においては市場価値から背離する市場価格を取り扱わない。

言い換えれば、市場価格と背離した市場価値を取り扱うのではなく、**市場価格と一致した市場価値を取り扱う**というのである。市場価格は市場価値の貨幣的表現である。これが第1点。第2には、「第3の場合」において、市場が供給過剰のため、最良の諸条件のもとで生産される商品の個別的価値によって規制される市場価格がその市場価値よりも上がることもなく、常に、その市場価値に張り付いているような市場価格は一種の独占価格的なものであって、そのような市場価格を取り扱わないと言っているのである。

#### 5) 「厳密に言えば」市場価値は平均価値

初めに指摘しておくべきことは、「厳密に言えば」平均価値が市場価値を確定するが平均価値としての市場価値は、「理想的な」市場価値であって、「現実には」偶然にしか見られないものであるということである。

マルクスは、「本当に、全く厳密に言えば」という語に次の断り書きをつけている、「現実には、ただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れるのだが」と。これは、現実的には大量商品の個別的価値が市場価値を規制し、この市場価値は平均価値に近似的に現れると言っているのである。

「第1の場合」では「数的関係または比率的数量関係」によって、現実的に大量商品の個別的価値が決定する市場価値は平均価値に一致する。しかしこの「数的関係」を少し変え両極不均衡とするならば、現実的に大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は平均価値に近似的に現れることになる。

「厳密に言えば」での叙述をみよう。「第1の場合」には「中位の価値によって規制される全商品総量の市場価値は各個の商品の個別的価値の総額に等しい。といっても、両極端で生産される商品にとっては、この市場価値は、それらに押し付けられた平均価値として現れる。その場合、最悪の極端で生産する人々は自分の商品をその個別的価値以下に売らなければならない、最良の極端で生産する人々はその商品の個別的価値以上に売る。」

「第1の場合」においては、「厳密に」言わなくても、市場価値は平均価値である。そして、この商品総量の価値総額は、この商品の市場価値総計に等しいのである。したがって、「現実的な」市場価値を示しておけばよい。「現実的に」「中位的価値によって規制される商品総量の市場価値は、個別的価値の総計に等しい。もっとも、両極端で生産される諸商品にとっては〔これらの商品の個別的価値はこの市場価値決定には参画せず〕押し付けられた平均価値として現れる。」

マルクスは、この「第1の場合」において、大量支配的規定を説くだけで、「厳密に言えば」平均価値が市場価値を確定すると一言も述べていないことに注目せよ。なぜならば、「厳密に」言わなくとも中位的大量商品の個別的価値が決定する市場価値は平均価値であるからである。

「第2の場合」には、現実的には「両極で生産される個別的価値量が相殺されないで、より悪い諸条件のもとで生産されたもの〔すなわち、大量商品の個別的価値〕が〔市場価値を〕決定する」と、先ず現実的な規定である「大量支配的規定」を与えてから言う、「厳密に言えば各個の商品の、また

は商品総量の各可除部分の、平均価格または市場価値は、いまでは、いろいろな条件のもとで生産される諸商品の価値の加算によって得られる商品総量の総価値と、この総価値から個々の商品に割り当たる可除部分とによって、規定されているであろう。」と。かように、算術平均としての平均価値＝市場価値を確定している。そして、このようにして確定された「市場価値は、有利な極に属する商品の個別的価値よりも高いばかりではなく、中位の層に属する商品の個別的価値に比べてもそれよりも高いであろう。だが、それは、やはり、不利な極で生産される商品の個別的価値よりも低いであろう。」と言う。そして市場価値＝平均価値が「どの程度までこれ[すなわち不利な極で生産される個別的価値]に近づくか、またはこれと一致するかは、全く、不利な極で生産される商品量がその商品部面でどれだけの量的範囲を占めるかによって定まる。」と言う。「最後に、需要の方がほんのわずかでも大きければ、不利な条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価値[すなわち、市場価値に一致する市場価格]を規定する。」と駄目を押している。

「最後に、第3の場合のように、有利な極で生産される商品量が、単に他方の極のものとは比べても中位の条件のものとは比べても、より大きい範囲を占めているならば、[現実的に有利な極で生産される大量商品の個別的価値が規制する]市場価値は中位の価値よりも低くなる。[[厳密に言えば]]両極と中位との価値総額の加算によって計算された平均価値は、この場合には中位の価値よりも低い。そして、それは、有利な極が占める範囲の相対的な大きさによって、中位の価値に近くもなれば遠くもなる。需要が供給に比べて弱ければ、有利な条件で生産される部分が、その大きさはどれだけであろうとも、その価格をその個別的価値まで引き下げることによって、のさばってくる。市場価値は、供給が需要をはなはだしく超過する場合を除けば、この最良の条件のもとで生産される商品のこの個別的価値とは一致しえない。」

以上の「厳密に言えば」での叙述をまとめておこう。現実的には市場価値は大量商品の個別的価値によって規制されるのだが、理想的には市場価値を確定するのは平均価値であるべきである。要点を記しておけば、①諸商品の価値総量の算術平均(＝相加平均)としての市場価値を確定しているのである。②「第1の場合」にのみ大量商品の個別的価値が商品総量の価値総量の平均価値に等しくなるが、「第2の場合」と「第3の場合」のいずれにおいても商品総量の価値総量の平均価値は大量商品の個別的価値に等しくないのである。③この平均価値としての市場価値は、先の「三つの場合」において三つの生産諸条件のもとでそれぞれ生産されている諸個別的価値と比べて高いか低いかを明らかにしているのである。「第1の場合」には諸商品総量の価値総量の平均価値としての市場価値——は、中位的生産諸条件のもとで生産される諸商品の個別的価値に等しく、両極端で生産される諸商品にとっては押し付けられた平均価値として現れるのであり、その平均価値は、優位の生産諸条件のもとで生産される個別的価値よりも高く、劣位の生産諸条件のもとで生産される商品の個別的価値よりも低いということである。「第2の場合」には確定された平均価値＝市場価値は、優位の生産諸条件のもとで生産される商品の個別的価値ばかりではなく、中位的生産諸条件のもとで生産される商品の個別的価値よりも高く、劣位の生産諸条件のもとで生産されている商品の個別



的価値よりも低いであろう。「第3の場合」には平均価値＝市場価値は中位の諸条件のもとで生産される諸商品の個別的価値以下であって、「そしてそれは、優位の極で生産される諸商品量の相対的な大きさによって、中位の価値に近くもなれば遠くもなる。」

#### 6) 平均規定か支配的大量規定か

市場価値の規定に関して平均的規定か大量支配的規定かということをお問えば、答えは、理想的には平均規定だが、現実には支配的大量規定であるということに尽きるのである。

屋上屋くを架すことになりかねないが、市場価値規定に関する「大量支配的規定」の根拠について述べておこう。「剰余価値に関する諸学説・ノートⅪ」での「平均価値または費用価格と市場価格」において以下のように述べられてある。

「どの部類〔優位、中位、劣位の三つの部類——引用者〕が平均価値を確定するのに決定的であったかということは、主としてこれらの部類の数的関係または比率的数量関係によって定まるであろう。もし中位の部類が数のうえではるかに優勢であれば、これが平均的価値を決定するであろう。この部類が数のうえで劣勢であれば、そして平均的条件よりも悪い条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば、これがその部面の生産物の一般的価値を決定する。といっても、その場合に、この部類内でさらに最も不利な立場におかれている個々の資本家こそがこの決定をするのだと言おうというものでは、けっしてない。またそうしたことはとてもありそうにもない。」(ゴシック体は原文のイタリック。〔2〕手稿ノート543ページ)と。

この「数的関係または比率的数量関係」には、「ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編集」の『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集、第26巻、第2分冊』には編集者の注解がある、すなわち「企業者たちのいろいろな群の『数的関係または比率的数量関係』とマルクスがここで言っているのは、これらの群のそれぞれによって市場に出される生産物量のことである。」(〔2〕の注解10ページ)と。

この注解から読み取れることは、相異なる生産諸条件のもとで生産され相異なる個別的価値をもつ諸商品の数的比重〔「数的関係または比率的数量関係」のこと〕が市場価値の規定に重要な役割を演じるということである。

その生産部面で「標準的な社会的生産諸条件」のもとで生産されその部面で大量をなす商品の個別的価値が、数的にも価値量においても大量をなすがゆえをもってその部面での諸個別的価値を支配して、市場では諸商品の個別的価値の代表となり市場価値となる。

中位、劣位、優位の三つの生産諸条件のうちでいずれがその部面で大量をなす諸商品が生産されている「標準的な社会的条件」であるかということが問われなければならない。大内力氏はいち早くこう指摘されている。「いいかえれば、商品の価値は、その商品がどのような生産諸条件のもとで生産され、どのような量の労働を体化していようと、そのこと自体によって規定されるわけではなく、現存の社会的・標準的生産諸条件のもとで必要とされる労働量によって規定されるというの

である。」(傍点は大内。[3] 15ページ)と。

そして、「第1の場合」には「中位の生産諸条件」が「標準的な社会的生産諸条件」であり、「第2の場合」には「劣位の生産諸条件」がそれであり、「第3の場合」には「優位の生産諸条件」がそれである。

その生産部面で「標準的な社会的生産諸条件」のもとで生産されその部面で大量をなす商品の個別的価値こそが、その部面でこの商品大量が数的にも価値量においても大量をなすがゆえをもって、その部面で生産されているすべての諸商品の個別的価値を支配し、それらの代表的な価値、つまり市場価値となりうるのである。マルクスが市場価値のことを「支配的な価値」と見なしたのもそういう意味にほかならないのである。「剰余価値に関する諸学説・ノートⅪ」において「その生産部面で支配的な価値、すなわち市場価値は、云々」([1]手稿578ページ)という表現があり、これからして市場価値はその部面での「支配的な価値」ともみなされるのである。

以上要するに、現実には、商品の市場価値は「現存の社会的・標準的生産諸条件」のもとで生産される大量商品の個別的価値によって規制される。なぜならば、この生産部面で生産されその部面で大量をなす商品の個別的価値こそが、それが数量的にも価値量においても大量なるがゆえに、この生産部面で生産されているすべての諸商品の諸価値の「支配的な価値」となり、いわば「代表的な価値」たりうるからである。このことを競争が媒介することはいうまでもない。

大内力氏がかつて指摘されたように、「平均価値は、算術計算としてはいちおう成りたちうるかもしれない。しかし市場における競争をつうじて、なにゆえそのような平均価値が市場価値を規制するのかということは、まったくわからないし、このように算術的に計算された平均価値と、商品の再生産のために必要な労働量とが、どういう関係にあるのかもわからない。つまりそれは価値法則は、資本主義的再生産全体を貫いてみずからを実現してゆく法則性であるという理解とはまったく無縁な、機械的な理解の仕方なのである。」([4] 21～2ページ)と。

### 3. 市場価値決定と需要・供給関係

まず指摘しておくべきことは、需給関係を問題にする場合には、「理想的な」市場価値＝平均価値に一致している市場価格と、現実的に大量商品の個別的価値によって規制される市場価値に一致する市場価格とが対象になっていることである。これについては、すでに、前稿([7])で指摘しておいた。ここでは、補論的にこの問題を取り扱う。市場価値と需要供給関係を取り扱うにあたってはあらかじめ指摘しておくべきことは、「需要供給は価値の市場価値への転化を前提する」と言うことである。「厳密に言えば」平均価値が市場価値を決定するが現実には大量商品の個別的価値が市場価値を決定する。かように決定された市場価値を前提として需給関係が論述されるのである。

#### 1) 平均価値＝市場価値と「普通の」需給関係

「厳密に言えば」で平均価値によって確定された市場価値どおりに販売され、購買されるための

需要供給関係について述べておこう。前に研究された「三つの場合」のいずれにおいても、この「商品量が普通の供給量だと仮定しよう。その場合、生産された商品の一部分がときには市場から引き上げられることもあるという可能性は無視することにしよう。いまこの商品量に対する需要もまた普通の需要であるのであればこの商品はその市場価値 [= 平均価値] で売られる。この市場価値が、前に研究した三つの場合のいずれの場合で調整されようともそうである。この商品分量はある欲望をみたすだけでなく、それを社会的規模でみたす。」(ゴシック体は引用者)。平均価値で確定された市場価値は、「買い手たちのあいだの競争によって媒介されて」市場価格と一致する。言い換えれば、再生産量が「普通の供給量」であり、需要が「普通の需要」である場合には、「三つの場合」のいずれの場合でも、商品総量は市場価値 = 平均価値どおりに売られることができるのである。この商品総量は、この市場価値で販売され購買されることをもって、社会的欲望を「社会的規模」でみたす。そこでこの市場価値は「社会的価値」となるのである。

重ねて言えば、マルクスは、諸商品の諸価値の算術平均によって確定された平均価値 = 市場価値どおりに諸商品が販売され購買されるような需給関係を「普通の供給量」と「普通の需要」との対応関係としてとらえているのである。この商品量が「普通の供給量」であり、需要もまた「普通の需要」であれば、「第1の場合」においてはもちろんのこと、「第2の場合」においても、「第3の場合」においても、諸商品は、平均価値としての市場価値どおりに売れるということである。

ここでマルクスは「需要と供給」についてこう述べている。

「本当の困難は、需要と供給との一致ということが意味していることの規定にある。／需要と供給とが一致するのは、一定の生産部門の商品量がその市場価値どおりに、それよりも高くも安くもなく売れるように需要と供給との割合がなっている場合である。これは、われわれが聞く第1のものである。／第2に聞くのは、商品がその市場価値どおりに売れる場合には需要と供給とは一致している、ということである。／需要と供給とが一致すれば、作用しなくなる……からこそ商品はその市場価値で売られるのである。……。需要と供給が相殺されてしまえば、それはなにごととも説明しなくなり、市場価値には作用しないのであって、なぜ市場価値がちょうどこの貨幣額で表されて他のどの貨幣額でも表されないのかということについては、需要供給はまったくなにも教えてくれないのである。」

ここで言われていることはこうである。①需要と供給とが一致すれば、市場価格は市場価値に一致する。②市場価格（貨幣額）はその市場価値の貨幣的表現であることは言うまでもない。「価格はその一般的概念から見ればさしあたりはただ貨幣形態にある価値でしかない」と同様に、市場価格は貨幣形態である市場価値でしかないのである。③市場価格と一致した市場価値を決定するのは需要供給関係ではなく、「厳密に言えば」平均価値である。現実的には大量商品の個別的価値が市場価値を決定することはいはばらくおいておく。④いずれにしても、需要と供給との相互作用から、「資本主義的生産の現実の内的諸法則を明らかに説明することができないのは明らかである。」マルクスは、続けて言う、「需要と供給とは実際にはけっして一致しない」が、「経済学では需要と供給が

一致すると想定される」のは、「現象をその合則的な姿、その概念に一致する姿で考察することである。すなわち、現象を、需要と供給の運動によって引き起こされる外観にかかわりなく考察するためである。他方では、需要供給の運動の現実の傾向を見つけだすため、いわばそれを確定するためである。」「与えられたどの場合にも需要と供給とは決して一致しないとしても、それらの不一致は次々に続いて起きるのだから——そして一方への片寄りの結果が反対の方向への別のかたよりを呼び起こすのだから——、大なり小なりの1期間の全体を見れば、供給と需要は絶えず一致するのである。」

それでは、需要と供給の一致をどのように理解すべきであろうか。マルクスは需要と供給を分析して言う、ある商品がその市場価値＝平均価値どおりに売られるためには、「すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためにはこの商品種類の総量に振り向けられた社会的労働の総量が、この商品に対する社会的欲望すなわち支払い能力のある社会的欲望の量に対応していなければならない。競争、需要供給関係の変動に対する市場価格の変動は、それぞれの商品種類に振り向けられる労働の総量を絶えずこの限度に引きもどそうとするのである。」と。

この商品種類の総量の生産に振り向けられた社会的労働の総量と「この商品に対する社会的欲望すなわち支払能力のある社会的欲望の量」とが合致している場合には需要と供給とが一致していると、マルクスは考えている。言い換えれば、この商品総量に含まれている「社会的労働の総量」とこの商品総量の市場価格との一致である。この市場価格は、この商品量に対して支払われた貨幣額すなわち「社会的欲望」を表現している。需要と供給の一致である。こうもいえる、この商品の市場価値の総計とその市場価格の総額との一致、つまり市場価値と市場価格との一致が需要と供給の一致であると。

マルクスは、需給一致を次のようにも表現している。「しかし、一定の物品の生産に振り向けられる社会的労働の範囲が、充たされるべき社会的欲望の範囲に適合しており、したがって生産された商品量が不変な需要のもとでの普通の規模に適合しているならば、この商品は市場価値で売られる。諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である。この法則から出発して背離を説明するべきであって、逆に背離から法則そのものを説明すべきではない。」と。

要するに、生産された商品総量とその市場価値＝平均価値どおりに販売され購買された場合には需要と供給は一致している。そしてこの場合での、商品総量の供給量を「普通の供給量」とみなし、これに対応する需要を「普通の需要」と、マルクスはみなしていた。結局、「普通の」需給の組合わせとは、諸商品がその市場価値＝平均価値どおりに売られる場合の需給の一致を意味するのである。一定の商品量が市場価値＝平均価値どおりに売られた場合には、この商品量を生産するのに振り向けられた社会的労働の規模と、この商品総量に対する「支払い能力のある社会的欲望の量——市場では需要」とは合致しているのである。

ところでマルクスは、「市場価値がなんであろうとこれを取り出すためには需要と供給とが均衡し

ていなければならない」と述べている。そこで問題となるのは、マルクスは、「第2の場合」と「第3の場合」におけるようにその部面で生産される諸商品のうち大量を占める商品が決定する市場価値どおりに売られた場合にもこの商品総量の供給と需要が一致しているとみなしたかどうかということである。「第1の場合」には、「現実的に」中位的生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値によって決定される市場価値が平均価値に等しいのだから問題がない。しかし、「第2の場合」と「第3の場合」にはいずれの場合にも大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は平均価値に近似的に現れている。マルクスが平均価値に近似的な市場価値で売られた場合にも需要と供給が一致しているとみなしていたと考えるのが妥当であろう。もしそうだとするならば、「厳密に言えば」での市場価値＝平均価値どおりに諸商品が売られた場合での需給一致と、「現実的に」に大量商品の個別的価値によって規制される市場価値＝平均価値どおりに売られた場合での需給一致と二通りの需給一致があることになる。それゆえ、マルクスは、前者の需給一致を「普通の供給量」と「普通の需要」との対応関係としてとらえ、後者の需給一致を「異常な組合わせ」としてとらえたものとして理解される。

## 2) 「現実的な」市場価値規定と需給関係

「第2の場合」や「第3の場合」におけるように、同一市場において同種の諸商品が大量商品の個別的価値によって規制された市場価値どおりに販売された場合には、この諸商品の個別的価値総計はその市場価値総計とは一致しないが、近似的である。

マルクスは、「普通の」需給関係のもとで確定される市場価値から市場価格が背離していくことについてこう述べている。

「これとは反対に、商品量がそれに対する需要よりも小さいかまたは大きいならば、その場合に市場価値〔平均価値としての市場価値のこと〕からの市場価格の背離が生じうる。そして、第1の背離は、もし商品量が少なすぎれば、常に、最悪の諸条件のもとで生産される商品が市場価値を規制し、もし多すぎれば、つねに、最良の諸条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するということであり、したがって、それぞれ違った諸条件のもとで生産される商品量の単なる比率から見れば別の結果〔平均価値のこと〕が生じうるはずにもかかわらず、両極の一方が市場価値を規制するということである。」

この叙述について注解しておけば、「第2の場合」において、市場価格の側からみれば、商品総量を市場価値＝平均価値どおりの販売・購買を可能にした需要が不変のもとで、それに対応する「普通の供給量」よりもその商品の再生産量が少なすぎるならば、その市場価格はその市場価値＝平均価値から背離して上昇し、最悪の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値と一致することになる。市場価格がこの大量商品の個別的価値と一致すればこの個別的価値が市場価値を規制する。または、再生産量が「普通の供給量」であるのに、需要が「普通の需要」よりも大きくなるなれば、その市場価格は、その平均価値から背離し上昇し、最悪の諸条件のもとで生産される大量

商品の個別的価値と一致する。こうして、最悪の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値が市場価値を規制することになる。

「第3の場合」においては「第2の場合」の逆である。その商品の需要が不変のもとで再生産量がその「普通の供給量」よりも多すぎれば、その市場価格はその平均価値から背離して下落する。そして、その市場価格が最良の生産諸条件のもとで生産された大量商品の個別的価値に一致することになる。

「現実的な」市場価値と一致する市場価格についてこうも説明する。

「第2の場合」と「第3の場合」において、「最悪の諸条件や最良の諸条件のもとで生産される商品が市場価値を規制する」ことを可能とするような需給関係について、マルクスは言う、「ただ異常な組合せのもとでのみ、最悪の諸条件または最良の諸条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するのであって、市場価値はそれ自身が市場価格の変動の中心をなすのである——といっても市場価格は同じ種類の商品では同じなのである。平均価値での、すなわち両極の中間にある大量の商品の中位的価値での、商品の供給が普通の需要をみたす場合には、市場価値よりも低い個別的価値をもつ商品は特別剰余価値または超過利潤を実現するが、市場価値よりも高い個別的価値をもつ商品はそれ自身が含んでいる剰余価値の1部分を実現することができないのである。」と。ここで説かれているのは、「第1の場合」と「第2の場合」と「第3の場合」において現実的に大量商品の個別的価値に規制される市場価値に一致する市場価格の需給関係についてである。

その文章の後半のくだりで説かれてあることを敷衍的に説明することにしよう、「第1の場合」において、「平均価値での、すなわち両極の中間にある大量の商品の中位的価値での、商品の供給」が、言い換えれば、現実的に中位的生産諸条件のもとで生産されている大量商品の個別的価値によって決定された市場価値＝平均価値での商品の供給が、「普通の需要」をみたすならば、前述しておいたように、この商品総量は、その市場価値＝平均価値どおりに販売され購買される。したがって、優位の生産諸条件のもとで生産される諸商品の個別的価値は市場価値＝平均価値よりも低く、それゆえ、その諸商品は「特別剰余価値または超過利潤を実現する。」しかし、劣位の生産諸条件のもとで生産されてその市場価値＝平均価値よりも高い個別的価値をもつ諸商品は「それ自身が含んでいる剰余価値の一部分を実現することができないのである。」

問題は、先の文章の前半のくだりで「異常な組合せ」をどのように理解すべきかということである。これについては「第2の場合」と「第3の場合」のような生産諸条件の組み合わせのことだという考えが通説である。確かに、「第2の場合」と「第3の場合」におけるような中位・劣位・優位という三つの「生産諸条件の組合せ」のもとでのみ、劣位の〔第2の場合〕または優位の〔第3の場合〕の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値が市場価値を規制することが可能となるのである。したがって、市場価値自体の現実的な規制という点に焦点を合わせてみれば、「異常な組合せ」を生産諸条件の「異常な組合せ」であるという考えも成り立つであろう。この解釈は、現実的に規制された市場価値の側からみてのことである。

しかしながら、取り扱われている市場価値は市場価格と一致したものであり、したがって市場価格の側からも見なければならぬ。諸個別的「価値の市場価値への転化を前提」として商品の市場価格の側からみれば、「支払能力のある社会的欲望——市場では需要」の考察が必要となる。その市場価値に一致する市場価格に焦点をあわせてみれば、この「異常な組合わせ」とは需給の「異常な組合わせ」といわざるをえないのである。

すでに指摘しておいたように、「この商品量が普通の供給量だと仮定し、その場合、生産された商品の一部分がときには市場から引きあげられるという可能性を無視することとし、いまこの商品量に対する需要もまた普通の需要であるのであれば、」諸商品は市場価値＝平均価値どおりに販売され購買される。この場合において「普通の供給量」に「普通の需要」が対応する需給関係が需給の「普通の」組合わせである。同一生産部面での同種の諸商品にたいする需要が不変のもとで、この商品の再生産量が「普通の供給量」以上に増大するか、または「普通の供給量」以下に減少したと仮定しよう。この場合における需給関係は、需給の「異常な組合わせ」であるといえよう。あるいは、再生産量が「普通の供給量」であるのに、需要が「普通の需要」よりも大きくなるか小さくなる場合には、需給関係は、需給の「異常な組合わせ」であるといえるのである。マルクスはこう述べている。

「これに反して、需要が強くて、最悪の諸条件のもとで生産される商品の価値〔すなわち個別的価値〕によって価格が規制されても需要が収縮しないならば、このような商品が市場価値を規定する。このようなことが可能なのは、ただ需要が普通の需要をこえる場合か、または供給が普通の供給よりも減る場合だけである。最後に、〔第3の場合〕のように〕生産される商品の量が、中位の市場価値で売れる程度よりも大きくなれば、最良の諸条件のもとで生産される商品〔の個別的価値〕が市場価値を規制する。たとえば、そのような商品はちょうどその個別的価値〔すなわち、市場価値〕と同じかまたはそれに近い価格で売れるが、そのさい、最悪の諸条件のもとで生産される商品はおそらくその費用価格さえも実現できないし、また中位的平均の商品はそれに含まれている剰余価値の1部分が実現できないということも起こりうる。」（ゴシック体は引用者）

みられるように、「第2の場合」において、劣位の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値が市場価格＝市場価値を規定することが可能となるのは、この商品総量に対する需要が「普通の需要」を超える場合か、または供給が「普通の供給量」よりも減る場合においてだけである。

「第3の場合」において、この商品総量に対する需要が「普通の需要」よりも減るばあいか、供給が「普通の供給量」を超える場合においてのみ、優位の生産諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値が規制する市場価値に市場価格が一致することができるのである。この市場価格＝市場価値どおりに諸商品は販売され購買されることになるのである。

このように市場価値に一致した市場価格の側からみれば、「異常な組合わせ」は、需給の「異常な組合わせ」といわざるをえないのである。

要するに、「第2の場合」において、理想的に、「各個の商品の、または総商品量の各可除部分の、

平均価格または市場価値」どおりに販売され購買されることを可能とするような需給一致を需給の「普通の」組合わせであると考え。これに反して、現実に劣位の生産諸条件で生産される大量商品の個別的価値によって規制される市場価値どおりに販売され購買されることを可能とする需給一致を需給の「異常な組合わせ」であると考え。繰り返して言えば、この「異常な組合わせ」とは、「需要が普通の需要を超えているか、または供給が普通の供給以下に減っている」ことなのである。

#### 4. 市場価値と必要労働時間

先に例示した「第3の場合」においてその商品総量に対する「支払能力のある社会的欲望——市場では需要」——以下、社会的欲望と呼ぶ——が不変のもとで供給が「普通の供給量」以上に過剰に供給された場合に優位の生産諸条件のもとで生産された大量商品の個別的価値が市場価値を規制する。この市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」は、現実にそれに費やされた「必要労働時間」よりも少ないのである。この場合にこの「社会的必要労働時間」について、マルクスは「別個の意味をもつ」というのである。これについて考察しよう。

マルクスの次の所説を先に例示した「第3の場合」にあてはめて考えることにしよう。その部面で優位の生産諸条件のもとで生産されその部面で大量をなす商品の価値が規制する市場価値についてこう述べている。「ある商品種類の各個の物品または各一定量は、ただその生産に必要な社会的労働だけを含んでいても、そしてこの面からみればこの商品種類全体の市場価値はただ必要な労働だけを表しているとしても、もしこの一定の商品がそのときの社会的欲望を超える程度に生産されているならば、社会的労働時間の一部は浪費されたのであって、その場合にはこの商品量は市場では現実にそれに含まれているよりもずっとわずかな量の社会的労働を代表するのである。」と。

注解しておこう。市場価格と一致する「市場価値の決定は、現実の市場では買い手たちのあいだの競争によって媒介される。」言い換えれば、この商品総量に対する社会的欲望が、市場価格を通じて市場価値決定にかかわるのである。市場価値自体を決定するのは「厳密に言えば」平均価値だが、現実には「大量商品の個別的価値」である。市場価値自体の決定には社会的欲望は直接に関与しないのである。諸商品の個別的価値の「市場価値への転化を前提」としてこの商品総量に対する社会的欲望は、ただ、市場価格を通じて平均価値＝市場価値を実現させるか、個別的価値に規制される市場価値を実現させるか、にかかわるだけである。供給量が「普通の供給量」以上に市場に供給されるならば、市場価格は市場価値＝平均価値から背離してより下がるであろう。その市場価格が現実的な市場価値＝大量商品の個別的価値に一致した場合には、この商品総量はその市場価値どおりに販売され購買される。しかし、市場においてこの現実の市場価値が表示する社会的労働は、平均価値に現実に含まれていた社会的労働よりいっそうわずかな社会的労働を代表することになる。

要するに、この商品総量がそのときの社会的欲望を超える程度に生産されている場合には、現実に大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は、その商品総量の価値総量の平均価値に含まれている社会的労働よりも「ずっとわずかな量の社会的労働を代表するのである。」



「需要と生産物量との差がもっと大きければ」、市場価格はその市場価値から背離して一段と少ない社会的労働を表示することになる。

マルクスは、現実的な市場価値が市場で代表する社会的労働を「別個の意味」をもつと述べている。

『資本論』第3巻の第6編「超過利潤の地代への転化」第37章「緒論」において言う、「たとえば、割合から見て多すぎる綿織物が生産されているとしよう。といっても、織物というこの総生産物には与えられた条件のもとでそのために必要な労働時間が実現されているとしよう。しかし、とにかくこの特殊な部門では多すぎる社会的労働が支出されているのである。すなわち、生産物の1部分はむだなのである。だから、その全体が、まるでそれが必要な割合で生産されてでもいるかのようにはしか売られないのである。このような、社会的労働時間のうちからいろいろな特殊な生産面に振り向けることのできる部分の量的な制限は、ただ価値法則一般のいっそう展開された表現にしかないのである。といっても、必要労働時間はここではまた別個の意味を含んでいるのではあるが。つまり、社会的労働時間のうちただこれだけの分量が社会的欲望の充足のために必要であるということである。」（ゴシック体は引用者。[3] 原著648ページ）。

みられるように、「必要労働時間」が別個の意味を含むことになるのは、「社会的欲望、すなわち社会的規模での使用価値がここでは社会的総労働時間のうちからいろいろな特殊な生産面に割り当てられる部分を規定するものとして現れる」（同上）からである。

「別個の意味をもつ」ということについて、二通りの理解の仕方があると思える。

一つは、「厳密に言えば」平均価値によって確定された商品総量の市場価値＝平均価値に対して、市場において商品総量を吸収するだけの「支払能力のある社会的欲望」があり、この市場価値どおりに商品総量が販売され購買された場合には、この商品総量の市場価値は、その価値総量に等しい。したがって、この商品総量の市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」はその商品総量の生産に必要とした労働時間に相等しい。この場合には「別個の意味」をもたないという理解の仕方である。それゆえに、両者が相等しくない場合にのみ「別個の意味をもつ」ということになる。今一つは、市場において社会的欲望を媒介として市場価値が決定されるかぎりでは、たとえ市場価値が代表する「社会的必要労働時間」が平均価値に含まれている「必要労働時間」と等しくとも、「社会的労働時間のうちのこれだけがこの社会的欲望の充足に必要なだ」という意味で「別個の意味」をもつという理解の仕方である。いずれの理解の仕方が正しいのであろうか。

「別個の意味」は上の二つの理解の上に立つものだと考えられる。現実的にはこの「第3の場合」には優位の大量商品が市場価値を決定する。需要 [= 「普通の需要」] が不変なのに供給が「普通の供給量」以上に生産されるならば、その部面で優位の大量商品の個別的価値が規制した市場価値＝市場価格どおりに商品が売られる。この場合にはこの商品総量の市場価値は、この商品総量の価値総量に等しくないのである。したがって、この商品総量の市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」は、その商品総量の価値総量に等しくなく、それよりも小さいのである。それゆえ、そ

の価値総量に対してこの「社会的必要労働時間」を「別個の意味をもつ」ものと理解される。

さらにこの商品総量の市場価値は、商品がこの市場価値で販売され購買された場合には「社会的労働時間のうちこれだけがこの社会的欲望の充足に必要なだという」意味において「別個の意味をもつ」ものと理解できるのである。

「第2の場合」においても現実的に大量商品の個別的価値は市場価値を規制する。再生産量が変わらないのに需要が「普通の需要」を超える場合には、この商品の市場価格がその市場価値に一致して、その市場価値どおりに商品総量は販売され購買される。この市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」は、この商品総量の価値総量よりも大きいのである。そして、この市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」は、「社会的労働時間のうちこれだけがこの社会的欲望の充足に必要なだという」意味で、「別個の意味」をもつのである。

「第1の場合」において、その部面で中位的生産諸条件のもとで生産されその部面で大量をなす商品の個別的価値は現実に市場価値を規定する。この場合の需給関係は、この商品量が「普通の供給量」であり、この商品量もまた「普通の需要」であるというような需給関係である。こうも言える、「この商品総量の生産にふり向けられた社会的労働の規模が、充たされるべき社会的欲望の規模に適合しており、したがって生産された商品量が不変な需要のもとでの普通の規模に適合している」と。この商品総量の市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」は、この商品総量の価値総量に相等しいのである。

この場合にも「社会的労働時間のうちこれだけの分量が社会的欲望の充足のために必要だ」という意味では「別個の意味を含んでいる」と言えるのであろうか。この商品総量の市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」が社会的欲望を充足するために必要だという意味では、この「必要労働時間」は「別個の意味」をもつと言えないことはないであろう。しかし、この商品総量の価値総量、すなわち「社会的必要労働時間」と、この商品総量の市場価値が市場で代表する「社会的必要労働時間」と等しいのだから、とりたてて後者の「必要労働時間」を「別個の意味」をもつという必要がないといえるのではなかろうか。

要するに、「第2の場合」と「第3の場合」におけるように現実的な市場価値どおりに販売され購買された場合には市場価値または「社会的価値」が表示する「社会的必要労働時間」は、この商品量の生産のために現実に必要とした労働時間とは一致せず、「社会的労働時間のうちこれだけの分量が社会的欲望の充足のために必要である」と言う意味で「別個の意味を含む」ということである。

## 5. 結 語

市場価値の決定と市場価格の決定とは相異なるものである。市場価値規定に関していえば、「厳密に言えば」平均価値が市場価値を確定するが、現実には大量商品の個別的価値が市場価値を規制する。市場価格を決定するのは需要供給の関係である。市場価値の諸規定においては市場価格と市場価値との一致を前提とする。市場価格は市場価値の貨幣的表現である。需要と供給は、諸個別的価値

の「市場価値への転化」を前提とする。

需要と供給とが一致すれば、諸商品はその市場価値＝市場価格どおりに販売され購買される。「厳密に言えば」平均価値によって確定される市場価値＝市場価格の場合での、需給一致は、「普通の供給量」と「普通の需要」との対応関係としてとらえられている。再生産量が「普通の供給量」であり、需要もまた「普通の需要」である場合には、中位的価値をもつ商品大量という「第1の場合」において、劣位の生産諸条件のもとで生産される商品が相対的に大量という「第2の場合」においても、優位の生産諸条件のもとで生産される商品が相対的に大量という「第3の場合」においても、平均価値が確定する市場価値＝市場価格どおりに売られる。

再生産量が「普通の供給量」であり、需要が「普通の需要」であるというような需給一致は理論的には想定できるとしても、現実にはありえないのである。

「第2の場合」において、現実には劣位の生産諸条件のもとで生産されて相対的に大量を占める商品の個別的価値が市場価値を規制する。この市場価値に市場価格が一致することを可能とする需給関係は、需給の「異常な組み合わせ」である。すなわち、再生産量が「普通の供給量」であるのだが、需要が「普通の需要」よりも大きくなるのである。または、需要が不変のもとで、再生産量が「普通の供給量」よりも減る場合である。こうした需給の「異常な組み合わせ」のもとで成立した市場価値＝市場価格どおりに、諸商品は販売され、購買されるのである。

「第3の場合」には優位の生産諸条件のもとで生産されて相対的に大量を占める商品の個別的価値が市場価値を規制する。需要が不変のもとで再生産量が「普通の供給量」よりも多い場合には、市場価格はその市場価値に一致する。または、再生産量が「普通の供給量」であるのだが、需要が「普通の需要」以下に減る場合には、市場価格はその市場価値に一致する。つまり、需給の「異常な組み合わせ」のもとでのみ、優位の生産諸条件のもとでの大量商品の個別的価値が規制する市場価値に市場価格が一致し、諸商品はその市場価値＝市場価格どおりに販売され購買される。

「第3の場合」において、優位の生産諸条件のもとでの大量商品の個別的価値が規制する市場価値は平均価値に近似的であるが、平均価値と一致しない。この商品の市場価値＝市場価格が市場で代表する「必要労働時間」は、この商品を生産するために現実に必要とした労働時間よりも少ないのである。この「必要労働時間」は、総「社会的労働時間のうちただこれだけの分量が社会的欲望の充足のためにお必要であると言う」意味において「別個の意味」をもつのである。

#### 参考文献

- [1] マルクス『資本論草稿集』⑥『経済学批判（1861-1863年草稿）』第3分冊（大月書店、1981年）、本巻翻訳者：時永淑／安田展敏：本巻統一者時永淑。この[MEGA]第2部第3巻第3分冊は、1861-1863年草稿のノート第10冊（445ページ）から第13冊（752ページ）までから成る「剰余価値に関する諸学説」の第2の部分に掲載されている。この訳書を使用し、引用箇所は手稿ページを本文中に示す。Karl Marx zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863) Text・Teil3, Dietz Verlag Berlin, 1978.
- [2] 翻訳者・時永淑、統一者・岡崎次郎、ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編

集の『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集、第26巻、第2分冊』(Karl Marx・Friedrich Engels Werke, Band 26, Zweiter Teil, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Diets Verlag, Berlin, 1967.)

[3] 『資本論』第3巻第10章「競争による一般的利潤率の平均化、市場価格と市場価値、超過利潤。」(zhetes Kapital, Ausgleihung der allgemeinen Profitrate durch die Konkurrenz. Marktpreise und Marktwerte. Surplusprofit.) Karl Marx, Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie, Dritter Band, Buch III: Der Gesamtprozeß der kapitalistischen Produktion, Diets Verlag Berlin 1964, SS.182～209.

訳本は、長谷部文雄訳『資本論』第3部上册(青木書店, 1954年)と、岡崎次郎訳『資本論』第3巻第1分冊、『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻第1分冊(大月書店, 1996年)とを利用した。この訳本からの引用はすべて第10章からであるから、引用頁は付さないことにした。

[4] 大内力『地代と土地所有』(東京大学出版会, 1958年)

[5] 山本二三丸『価値論研究』(青木書店, 1962年)。

[6] 鳥居伸好「第3部第10章における〈市場価値〉規定をめぐる論争」, 本間要一郎／富塚良三編『資本論体系』第5巻「利潤・生産価格」(有斐閣, 1994年), 460—473ページ。

[7] 東井正美「市場価格と市場価値」, 関西大学『経済論集』第48巻第4号(1999年3月)